

MATE (マテ)

作 猿橋 勇人

キャスト 男 1

男 2

王

舞台には十字架。

男 1

おい！

誰か私の物語を書いてくれ！

誰か私の物語を書いてくれ！

なぜあいつには物語があつて私には無いのだ！

光と影があるように、表と裏があるように、カセットテープ

にA面とB面があるように、まあこの例えは平成という時代に生まれ
た者にとっては実感の無い、ある意味ファンタジーのような例えか
もしれないが、そんなことはどうだっていい。

私にもう少しスポットライトを当ててくれたっていいじゃないか。

おい、その小説家！

私の物語を書いてくれ！

おい、その映画監督！

私の物語を撮ってくれ！

おい、そのシンガーソングライター！

どうか私の物語を歌ってくれ！

おい、その劇作家！

お願いだから私の物語を劇的に書いてくれ！

：これだけ叫んだところで、どうせ誰も書いてはくれないんだ。

私の物語なんて。

私の物語はB面にもカップリングソングにもなりはしないのだ。

ならば：ならば、せめて私の話だけでも聞いてくれないか。

昔話みたいに語り継がれなくなっちゃったっていい。

村上春樹の作品みたいに世界中で愛されたいとも思わない。

ちよつとだけ私の話に付き合ってくれ。

ちよつとだけ我慢してくれ。

これは、私の物語だ。

転換。

男、自らの体を十字架にくくりつける。
しかし、十字架は舞台に固定されていない。
また、リュックみたいに背負っているだけなので、動き回れる。

男1

私が住んでいる国の王は悪い奴だ。ほんとに悪い奴だ。
なぜなら、王はすぐに人を殺す。

風呂上がり綿棒で耳掃除をするように人を殺す。

基本的に王は私たち国民を全く信用していない。

私たちに何かされるんじゃないかって、いつも眉間に新品のスタッドレスタイヤみたいなシワを寄せて、毎日ストレスで胃がキリキリと痛むものだから、常に太田胃酸を右のポケットに忍ばせているんだ。

私は知ってるんだぞ。

え？左のポッケにや何が入っているかって？

もちろんチューインガムさ。

理由が分からない人は「美空ひばり 東京キッド」で検索してほしい。
：そんなことはどうだっていい。

王は私たち国民を、そして時には自分自身の親族まで殺す。

お気に入りのワイシャツに袖を通すように人を殺す。

自分にとって都合の悪くなった人間を、テキトーな理由をつけて簡単に処刑してしまう。

そんな、邪知暴虐な奴なんだ。

でも、そんなこともどうだっていい。

今、「どうでもよくないだろ」って思った人。

その感覚はとても正しい、そして美しい。

これからも、その感覚を大切にして生きてほしい。

それはさておき、そんな王が長いこと君臨しているこの国のムードは最悪で、一人残らず安物のLED電球みたいな暗い顔をしている。

ちよつとでも王の悪口を言えば簡単に処刑されてしまう。

先生に「お母さん」と言ってしまったときみたいに処刑されてしまう。

そんな空気が町中を漂っているものだから、悪口どころか、普通の会話だつてろくにできなくて、ひっそりとしているんだ。

そこに現れたのが、そう、あいつだ。

あいつの名前は伏せておく。

今の時代は学校の連絡網の作れないほど個人情報保護にナーバスになつていると聞いているからな、そこはぜひ理解してもらいたい。

あいつとは高校の同窓会以来一度も顔を合わせていない。

そんな奴と久々に顔を合わせた。

家の呼び鈴。

男1 はーい。

男1、ドアを開ける仕草。

男2が入ってくる。

男2 よっ。久しぶり。

男1 …ん？あの、どちら様ですか？

男2 え？覚えてないの俺だよ、俺。

男1 いや、俺だよと言われましても。

男2 …ほんとに覚えてないの？

男1 …ちよつと、分からないですね。

男2 ほら、高校生のときに一緒に部活終わりにひとりカラオケ行ったじゃんか。

男1 …（首をかしげる）

男2 …いや、ほら、二年のときに夏休み使って一緒にドミノ倒しやって世界記録更新したじゃんか。

男1 …（首をかしげる）

男2 …いやいやいや、ほら、卒業式の日二人で全力で校歌歌って次の日エイベックスからスカウト来たじゃんか。「君たちは第二のあのねのねになれる」って。

男1 …いや、ちよつと分からないですね。人違いじゃないですか？

男2 …そんな…

男1 …ウソだよ。久しぶり、太郎（仮）。

男2 …あいかわらずだな。一郎（仮）。

男1・男2 個人情報保護のため、本名は伏せております。

男1 で、太郎（仮）何でここに來てるの？転勤か何か？

男2 いやいや、ちよつと買い物に來ててさ、ほら、俺の住んでるところっていい感じに買い物できるところないからさ。

男1 そうなんだ。で、何で俺のここ來たの？

男2 いや、ちよつと、一郎（仮）に一つ頼みがあつてさ…

男1 俺の身代わりになつてくれないかな。

男2 （男1に合わせて口パクで）俺の身代わりになつてくれないかな。

男2、ストップ。

男 1

私は、一体何を頼まれたんだ？おつかい？お留守番？書類のコピー？

そんな現実的なものでも、常識的なものでもない。

身代わりを頼まれるなんて、ドラマとか映画とか、そういう世界の話だと思っていたが、まさか現実にあるとは思わなかった。

そもそも何の身代わりなのか分からない。

なんと言うか、あいつは話の進め方が下手なんだ。

結論を先に言うのは仕事をする上では大切なことかもしれないが、今回の場合は、ちよつとそれには当てはまらない、例外的なケースとして扱うべきだと思うよ、私的には。

だから言っちゃったよ私は。

はあ？って。

だってそれしか思いつかなかったんだもん。

仕方ないでしょ。

もしかしたら、それしか言えなかった私は世間で言うところのコミュニケーション能力不足というやつなのか？

だとすれば私はコミュニケーション能力と言う言葉自体を疑うよ。

とりあえず私はいきさつを聞くことにした。

まず、あいつは妹の結婚式の準備をするためにわざわざこの国までやってきたらしい。

あいつの妹とも久しく会っていないが、そこそこかわいかった。

芸能人で例えると、長澤まさみっぽい感じもするし、うん、けっこうもててたんじゃないかな、当時は。

そんな長澤まさみが：じゃなくて、あいつの妹が結婚式で着る衣装とか、パーティーで食べるオードブルを買っている途中、この国のひどい現状を偶然聞いて、一人で王の住む城に乗り込んだらしい。

いや、なんか腹立ちちゃってさ、ムカムカってきて、ほら、俺って昔から曲がったことが大嫌いじゃないですか。

知らねえよ。

男 2

だからさ、直接ガツンと言ってやるうって思ってたさ、乗り込んだ訳よ。

男 2、走って舞台からはける。

男 1

あいつはバカなのか？

一人で乗り込んだところで何ができる？

というか、そこまでやるかよ普通。

だからお前は学生時代に「空回り将軍」なんていう変なあだ名付けられるんだよ。

そんなあだ名付けられてまんざらでもないみたいな顔してんじゃね

えよ。

あいつは結局捕らえられて、処刑されることになった。

まあ、そりやそうだろうな。

でも、あいつはよりにもよってあの王に。

男2 (舞台袖から顔を出し) 妹の結婚式にどうしても出席したいので三日間待ってくれませんか。(顔を引っ込める)

男1 とか言って頭を下げたらしい。

そんな理由で待ってくれなんて、あの王が許す訳ないだろ。

それが許されるならこんな国にはなつてない…

王 (舞台袖から顔を出し) あ、いいよ。(顔を引っ込める)

男2 (舞台袖から顔を出し) ありがとうございます。(顔を引っ込める)

男1 なんて許しちゃうんだよ。

あの王が一番嫌いなタイプのやつじゃんかそれ。

王 (舞台袖から顔を出し) いやあ、なんかグツとくるね。(顔を引っ込める)

男2 (舞台袖から顔を出し) ありがとうございます。(顔を引っ込める)
男1 何でグツときちゃうんだよ。

王 (舞台袖から顔を出し) あ、でもその代わりさ…(舞台に登場)
男1 で、私が今ここにいる。身代わりとして。

王 クッキー食べる?

男1 いらないますよ。

王 おいしいのに。

男1 口の中がパサパサしてうまく喋れなくなっちゃうじゃないですか。

王 チッ、バレたか。

男1 悪い奴め。

王 じゃあ、俺食べるよ。ほんとおいしいんだよ、これ。

男1 どうぞ。

王 じゃあ、お言葉に甘えて。

王、クッキーを食べる。

男1 で、私があいつの代わりに処刑台に立っている。

あいつは今、長澤まさみの…じゃなくて、妹の結婚式に出席していることだろう。

私は今、あいつの帰りを待っている。

あいつは今、オードブルのエビチリをムシヤムシヤ食べていることだろう。

私は今、あいつの帰りを待っている。

男2、上手から下手へ全力で駆け抜ける。

王 三日間待ってやる。その代わり、お前の身代わりとなる者をここに連れて来い。そいつをこの処刑台に立たせる。三日後の日没までにお前がここに帰ってこなかったら、そいつを殺す。俺は殺すぞ。ハンバーガーに挟まったピクルスを抜くように殺すぞ。そこは絶対に譲らない。

男2、下手から上手へ全力で駆け抜ける。

男1 何で私が処刑されなきゃいけないんだ。

あまりに理不尽だろ。

ちようどその日は隣町まで行ってお得意さんの家の庭に立派な石畳をこしらえる予定だったんだ。

男1、電話をする仕草。

男1 あ、もしもし、一郎（仮）です。いつもお世話になっております。ご依頼いただきありがとうございました。石畳の取り付け工事なんですけれども、予定通り本日から工事に入らせていただきますので、よろしくお願いいたします。はい、失礼いたします。

男1、電話を切る仕草。

男1 そのあと大変だったんだよ。

またお得意さんに電話してさ、何度も謝ったよ。

「ちよつとこれから知り合いの身代わりをすることになりました」なんて言える訳ないじゃんか。

「なんだそりゃ」って言われるに決まってるよ。

私だってそう言うよ。

とりあえずそれっぽい言い訳作って謝って、まあお得意さんからも「全然構わないよ」って言ってもらえたからよかったけどさ。

これちよつと厳しいお客さんだったら100%キレルパターンだよ。

「なんだとゴルァ」とか言われてさ。

私そういうの苦手なんだよ。

怒鳴られると萎縮しちゃってさ、脳みそフリーズしちゃうわけ。

まあ、そつちは何とかなかったけどさ、こつちがどうにもならなかったらもう仕事どころじゃなくなっちゃうよ。

だって、処刑されちゃうんでしょ？私。
ハンバーガーにピクルスを挟むように処刑されちゃうんでしょ？
王 違うよ。ピクルスを抜くように殺すんだ。ここ大事だよ。覚えといて。
男 1 : すいません。まあ、どちらにしろ、めっ……ちや怖いじゃん。
王 クッキーいらんない？
男 1 いらんないです。
王 モンドセレクション金賞だよ。
男 1 それでもいらんないですよ。
王 おいしいのに。
男 1 あいつが戻ってきたら食べますよ。
王 戻ってこないよ。
男 1 まだ分らないじゃないですか。
王 いいや、戻ってこないね。あいつはお前をここに置いて逃げたんだ。
お前は間違いないで処刑される。
男 1 : だとしたら、私はあいつを憎んで死ななきゃいけませんね。
それはイヤだな。
王 イヤでもそうなるよ。お前は憎しみを抱えながら処刑される。人間な
んてそんなものだ。少なくとも俺にとってはね。
男 1 寂しい人生ですね。
王 なんだった？
男 1 : すいません。ちよつと空腹で気が立っちゃって。よろしければそ
のクッキーいただけませんか？
王 : 最初から欲しいって言えばいいのに。ほら、口開けて。
男 1 あ、はい。

男 1、口を開ける。
王、クッキーを男 1 の口の中へ。
男 1、食べる。

男 1 さすがモンドセレクション金賞ですね。おいしかったです。
王 でしょ？また食べたくなったら言いなさい。私もそこまで悪い人では
ない。と、自分では思っているんだけどね。遠慮せずに言いなさいよ。
男 1 分かりました。ありがとうございます。
王 どういたしました。

男 2、上手から下手へ全力で駆け抜ける。

男 1 私の人生はそんなにドラマチックなものではなかった。

毎日普通に仕事して、そりゃ大変なこともあるけどそれなりに乗り越えたり乗り越えられなかったりして、仕事終わればいつものコンビニ寄って安い缶チューハイとちよつとしたおつまみ買って、かわいい店員さんにさりげなく笑顔作ってさ、意味ないのに。家に着いたら缶チューハイ飲んで、テキストにテレビザッピングさせて、眠くなったら、眠るんだよ。

ほんとに何にもないんだよ、これといって。

でもさ、これが私の身の丈に合ってるのかなあって思うようになってさ、まあこれはこれで悪くないのかなって考えたりもするようになってはいたんだけど。

でも、満足していると言えばウソになる。

毎日ちよつとづつ、物足りなさを感じてはいたんだよ。

：：にしてもこれはちよつといきなりドラマチック過ぎるでしょ。

ドラマチックな人生初心者の私にはあまりにも刺激的過ぎて、今にも急性ドラマチックアレルギーで倒れてしまいそうだよ。

そこをなんとか我慢して、あいつの帰りを待っている。

あいつは今、長澤：じゃなくて、妹のお色直しの間にしばしのご歓談を楽しんでいることだろう。

私は今、あいつの帰りを待っている。

あいつは今、決して強くない酒を何杯も飲んで、妹が離れてしまう寂しさを紛らわせていることだろう。

私は今、あいつの帰りを待っている。

男2、下手から上手へ全力で駆け抜ける。

来ないね。

男1 それはそうでしょう。まだ初日なんですから。

王 いやいや、三日目だよ、今日。

男1 ：え？

王 あ、ずつと眠ってて気づかなかったんだね。

男1 ：眠ってた？

王 いや、なんか医者言うには、急性ドラマチックアレルギーってやつにかかったみたいで、倒れちゃったんだよ。俺びっくりしちゃった。

男1 ほんとにそんなアレルギーあったのか：じゃあ、今日の日没が来たら。

王 お前を処刑する。変更はなしだよ。

男1 ：マジかよ。

王 あいつは絶対来ないね。お前はだまされたんだよ。

男2、上手から下手へ全力で駆け抜ける。

男1

十字架にくくりつけられて、何が一番つらいと思う？
かゆいところを自由にかけないことさ。

鼻の下とか、ほっぺたの上の辺りとか、何度ムズムズしたことか。
顔をクニクニクニやって動かしてかゆみをなんとかごまかしたけど、それにも限度があるんだよ。

先週床屋さんに行ったときに今日の分までかゆいところをかいても
らえばよかったなあ。

床屋さん、私は今、かゆいところがいっぱいあります。

今日こそ、「かゆいところはありませんか」と聞いてくれませんか。

今日こそ、かゆいところを存分にかいてもらいたい。

それが、私の切なる願いです。

私がかゆみのストレスと、急に訪れた処刑の恐怖にさいなまれている
今このとき、あいつは何をしているのだろうか。

妹の結婚を祝うことはできたのだろうか。

あいつは、ここに帰ってくるのだろうか。

：いや、多分、戻って来ないのだろうな。

もし私があいつの立場だったら、わざわざ殺されるために戻るなんて
ことはしないよ。

殺されるために戻るなんて：私なら。

もしあいつが戻ってきたら、一発殴ってやる。

思いつきり。

転換。

夕方。

王

きれいな夕日だね。

男1

もうじき日が暮れる。

王

そうだね。日没までもうすぐだ。

男1

夕日が沈むスピードとシンクロするように私の気持ちも一緒に沈んで
いった。

王

何を言っているんだい？

男1

私は殺されるのだ。

王

会話がかみ合わないね。

男1

私は明日の夕日を見ることができない。

王

ちよっと、これはまずいね。

男1

明日の景色を見ることができない。

王 見てられないね。

男1 日常を、永遠に取り戻すことができない。

王 これはあまりにかわいそうだ。ちよっと待っててね。

王、その場を離れる。

男1 確かにひどい国ではあったが、その中でも心静かに暮らしていたんだよ、ずっと。

：こんな生活も悪くないのかなあなんて、思ってたんだよ。

：夕日がきれいだ。

：こんなきれいな夕日、久々に見たなあ。

もう見れないんだなあ、夕日。

王、液体の入ったコップを持って戻ってくる。

王 お待たせ。

男1 夕日がきれいだなあ。

王 おい。

男1 夕日がきれい。

王 おーい。

男1 ：ああ、いたんですか。

王 ほら。

王、コップを差し出す。

男1 ：何ですか？

王 これ？アクエリアス。せめて死ぬ前に喉の渇きだけは潤さなきゃ。

男1 ：毒エリアス？毒は飲めないですよ。

王 誰が毒エリアスって言った？そんなのどこにも売ってないよ。アクエリアス。公式サポート飲料だよ。何の公式なのかは分からないけど。

男1 いやあ、公式にサポートされた毒エリアスは飲めないですよ。

王 いや、もう何エリアスでも何でもいいから、ほら、飲みなさい。喉渴

いてるんでしょ？

男1 ：：：：いただきます。

王 じゃあ、俺飲ませるから。むせないように気をつけるんだよ。

男1 ：はい。

男1

王、男1の口にコップに近づけ、アクエリアスを飲ませる。

男1、飲み干す。

男1　：ありがとうございます。ちよつと落ち着きました。

王　それはよかった。で、どうだい？処刑される前の気持ちは。

男1　よく分からないです。初めてのことですし。まあ、始まりであつて終わりでもあるんですけどね。

王　冷静だねえ。

男1　いや、怖いですよもちろん。覚悟が決まったって感じでもないですし。

王　はどうなんですか？

王　俺？何が？

男1　処刑する前の気持ちってどういうものかなと思ひまして。

王　それはそれは楽しい気分さ。

男1　すごい感覚ですね。

王　俺は殺すぞ。仕事が終わった金曜日の夜みたいに殺すぞ。

男1　開放感が半端じゃないですね。

王　（ボソツと）そんな訳ないでしょ。

男1　ん？ちよつと聞こえなかったんですけど。

王　さてさて、これから俺、国民に宣言しなきゃいけないから。今から処刑の準備に入るって。ちよつと行ってくるよ……残念だったね。

王、国民の前に立つ。

王　おいお前たち！

男1　体に異常は無い。

王　これより処刑の準備に入る！

男1　ただ、体中に水分が染み込んでいくことだけは分かる。

王　この男は日没と共に処刑だ！

男1　なんの変哲も無いコップ1杯のアクエリアスは、喉の渇きだけでなく、この三日間ですっかり荒んでしまった私の心までも潤してくれたのかもしれない。

王　覚えておけお前たち！俺を裏切るとどういうことになるか、しかとその目に焼き付けるがよい！

男1　もうじき、日が暮れる。もうじき、私の人生が終わる。でも、それであいつが：メロスが生きられるのならば、それでよい。

王　俺はお前たちを、人間を信用していない！

男1　メロス、お前の幸せを心から願うよ。

王　お前たちはすぐ俺を裏切る！

男1　ついでと言うのもなんだけど、妹さんの幸せも心から願うよ。

王 お前たちを信じるだけ無駄だ！

男1 だから、最後まで、私が命を落とすそのときまで、お前がここに戻ってくることを、心から信じてもいいだろ？

王 俺の言うことを聞いていれればいいんだ！

男1 すまんメロス、私はお前のことを疑ってしまった。

王 もうすぐ日没だ！

男1 ほんとにすまない。

王 もうすぐ処刑だ！

男1 ただひたすらに、お前が戻ってくるのを待てばよかったんだ。

王 ただいまより、セリヌンティウスの特刑に入る！

男1 ただ静かに、お前を信じていればよかったんだ。

王 逃げずにその目で見届けろ！

舞台、セリヌンティウスのみになる。

男1

ただ待つだけの話なんて、誰も物語にはしてくれないよな。

やっぱり、この物語の主人公はメロス、お前じゃなきゃダメだよ。

スポットライトは、お前のためにあるんだ。

スポットライトはお前を待ってるぞ。

ついでに私も、お前を待ってるぞ。

だから、ここに戻ってこい。

メロス、お前に一つ頼みがあるんだ。

もしここに戻ってこれたなら、私を一発殴ってくれないか。

思いつきり。

メロス、私にとってお前は、友達だ。

竹馬の友だ。

セリヌンティウス、深呼吸をして、静かに目を閉じる。

何者かの走る姿、だんだん足音が大きくなる。

セリヌンティウス、足音に気づき、ゆっくり振り返る。

照明、ゆっくり暗くなっていく。

幕。

原作 太宰治 「走れメロス」